じつは義妹と初夢の話をしたのですが……

じつは義妹でした ～最近できた義理の弟の距離感がやたら近いわけ～

親の再婚でできた弟……だと思っていたら、じつは妹だった!?
距離感を勘違いして、恋に変わった兄弟たちの初夢は……
まさかの社会人編!?

AUTHOR 白井ムク MUKU SHIRAI
ILLUSTRATOR 千種みのり MINORI CHIGUSA

ある朝、俺と真嶋涼太がなにかの違和感で目覚めると、すぐ横で晶がそっと微笑んでいた。

「おはよ、涼太」

「ああ、おはよう、晶……」

俺は上体を起こし、寝惚け眼をこすりながら晶の顔をもう一度見る。

「どうしたの、涼太？　私の顔になにかついてる？」

「ああ、いや……」

……涼太？　私？

晶の言い方に多少の違和感を感じていると、すっと晶の手が俺の髪に伸びてきた。

「寝癖ボサボサだよ？　ちゃんと乾かして寝ないからだよ～」

と、くすりと笑いながら細い指で俺の髪を梳く。

少し照れくさい気分になりながら、俺は後頭部をガシガシと掻いた。

「ところで晶、なんで俺のベッドに？」

「なんでって、起こしにきただけだよ？」

「そ、そっか……」

『寝顔が可愛くて、つい見とれちゃってた』

「そ、そっか……」

やはり、なにか、違和感がある。

なんだろう、この、人の靴を間違えて履いたときのふかふか感のようなものは……？

「さ、早く起きて。今日は初出勤でしょ？」

「え？　初出勤？」

「会社」

「ああ、そうだったそうだった……」

俺は苦笑いを浮かべたが、晶は少し心配そうな顔で俺を見つめてくる。

「ほんと心配。私も会社までついていこっかなあ～。今日は大学の講義も無いし……」

「大学、講義……。そうか、晶、そうだったな……」

――忘れていた。

晶はこの春から大学四年生になった。

俺たちは実家を離れ、晶の大学の近くのアパートで同棲している。

「朝ごはんはもうできてるから早く顔洗ってきてね」

そう言う晶は楽しそうにキッチンのほうへと向かった。

その背中を見つめながら、俺はもう一度項を掻いた。

――なんだか、とても長い夢を見ていた気がする……。

その夢というのは、俺がまだ高校二年生だったときのこと。

その年の夏、俺たちの両親が再婚した。義母になった美由貴さんの連れ子が晶だった。晶はこのとき高校一年生で、俺たちは年子の「きょうだい」になった。

最初はお互いにぎこちなかったが、紆余曲折ありながらも、俺たちはすぐに打ち解けていった。

「涼太！　早く～！　朝ごはん冷めちゃうよ～！」

「ああ、うん！　すまん！」

晶に急かされて、俺は布団から出て洗面所に向かった。

顔を洗い、寝癖を直しながら、俺は先ほどの夢の続きを思い出した。

――じつは、俺は彼女のことを義理の弟だと思って接していた時期がある。

しかたがなかったと今さら言い訳するつもりはないが――あのころの晶はショートカットで、中性的かつ端正な顔立ちで、どこか男の子っぽく振る舞い、自分のことを「僕」と呼んでいた。

そのせいもあって、俺はしばらく彼女のことを弟だと勘違いして接していたのだ。

そして、親睦を深めようと一緒に風呂に入ることになり、俺は晶が義理の弟ではなく、じつは義妹だということを知るのだが――

『晶さんは、弟じゃなくて、妹だったんですか……？』

『そ、そうだけど、今さら……？』

――あのときの衝撃は、社会人になった今でもなかなか忘れられない。

＊＊＊

一通り済んでリビングに行くと、テーブルに彩り鮮やかな健康的な料理が並んでいた。

……彩り鮮やかな、健康的な料理？

そこでもなにか違和感を感じたが、ふわりと良い香りがして俺の腹がぐうと情けない音を出した。

「すまん、待たせた」

「いいえ、涼太のお寝坊さんは昔からだから～」

「皮肉はやめてくれ……」

「ふふっ、じゃあ召し上がれ」

「うん。――いただきます」

朝食を食べながら、俺は晶の顔をそれとなく眺めた。

昔の晶は、今のようにロングヘアーで自分のことを「私」と言うようなキャラではなかったな。

――変わったな、晶は……。

「どうしたの？」

「ああ、いや……」

「そんなにじっと見られると照れるんだけど……」

「いや、綺麗になったなぁって思って……」

「っ……!?　なに、いきなり～」

「あ、いや～……なんとなく。あははは……」

「もう？……。そういう不意打ち、やめて、ほんと……」

真っ赤になって照れている晶はやはり可愛くて、なんだか意地悪をしたくなる。

――昔は逆だった。

晶が弟だと発覚した後から、妹に慣れるための訓練が始まった。

訓練――とは言っても、ことあるごとに晶が俺に不意打ちをしてくるというもの。

いきなり背中に抱きつかれたり、びったりとくっついてきたりして、その度に俺はドキドキとさせられていた。

まあ、妹に慣れるための訓練というか、晶に慣れるための訓練というか……。

女子に免疫のなかった俺は、次第に晶との距離が縮まっていき、こうして同棲するまでに至ったのだが――晶はあのころからずっと俺のことを好きでいい続けてくれる。

なんだか感慨深い――お互いにお互いを想い合って、今の自分たちがいるのだと思うと。

「ほら、早く食べちゃって……」

顔を赤くしたままむすっとはしているが、嫌ではなさそうだ。

初めて会ったときの初々しい晶を思い出しながら、俺は朝食を平らげた。

＊＊＊

スーツに着替え終わり、持ち物の確認を済ませると、ちょうど七時半を回ったところだった。

玄関で革靴に履き替えると、

「はい、お弁当」

俺は晶から差し出された弁当の包みを受け取った。

「ありがとう、晶」

「ううん。忘れ物ない？」

「大丈夫」

「なんか心配。やっぱり私もついていこうかな～……」

「あはは、だから大丈夫だって」

晶の頭を撫でてやると、「子供扱いしないでよ～」とはにかんでいた。

「それじゃあ行ってきま――」

「あ、ちょっと待って！」

服の袖をいきなり引っ張られた。

「もう！　忘れ物！」

「え？　俺、なんか忘れてる？」

「行ってきますのチュ――は……？」

「あ、ああ、そうだったそうだった……」

そこで、なにか、急激な違和感に襲われた。

# 「さあ兄貴、『僕にチューするんだっ!』」

「えっと晶、いつも俺たち、こんなことしてたっけ？」
「え？　なに、今さら？」
「ああ、いや、確認のため……」
苦笑いを浮かべていると、「早くして」と晶が促してくる。
「はい、チュー……」
と、晶が目を瞑って唇を差し出してくる。
――まあ、いつものことならするべきか……。
可愛いキス顔に迫られて、俺もそれとなく唇を差し出して――ん？
……んんっ!?
「――待て……」
「え？　どうしたの涼太……？」
「お前、誰だ？」
「へ!?　私だよ、涼太？　晶だよ？」
彼女は戸惑い悲しそうな表情を見せたが、俺は騙されない。
「いや、俺の知っている晶はこんなんじゃない！　俺の知っている晶は、自分のことを『僕』と言い、俺のことは涼太じゃなくて『兄貴』と呼ぶ！」
「それは……お互いに大人になったからで……」
「いいや！　俺の知っている晶は朝から可愛らしく俺のことを起こしたり、彩りの良い朝食を作ったりしない！」
俺の知っている晶は……そうだ――
「――いきなり寝ている俺にダイブしてきたり、包丁を使わないズボラ料理を平気で手料理とか言っちゃう、もっと弟みたいな義妹だっ！」
すると、晶――いや『彼女』は口の端をくいっと曲げた。
「……へぇ～、鈍感なくせにやるじゃん？」
ぞっとするようなその表情に、俺は思わずたじろぐ。
後退すると背に扉があたった。
逃げ道がないことを俺が悟ったとき、「僕から逃げられると思ってるのかい？」
と『彼女』は凍りつくような声を発した。
「お前は、いったい……」
「僕の正体がわからないなんて、まだまだだね……――」
すると彼女は右手を左頸に置き、そして――
バリバリバリバリ――！
――なんと皮膚を剥がした……いや、皮膚ではない。
それは皮膚を覆っていた特殊メイクのようなもの。
それと同時に頭に被っていたカツラが取れ、それらがバサリと地面に落ちた。
「ふっふっふ――これで僕の正体がわかったかな？」
「なっ……お前はっ!?」
俺は声を失った。なんと正体を現したのは――
「あき、ら……」
――そう。
それは高校一年生のときの晶だった……ん？
「……いや、晶？　なんでお前、大人になったふりをしていたんだ？」
「なんでって、兄貴がどちらの僕が好きか試したんだよ」
「どういうことだ……？」
「オトナ女子っぽい私と、弟みたいな義妹の僕……兄貴はどっちが好みかなあって思って」
「くっ……なんて悩ましい義妹なんだっ!?」
すると晶はずいっと俺に近づいてくる。
俺は逃げようとするが、扉のノブを回してもガチャガチャと音を立てるだけで開く気配がない。
「さあ兄貴、僕にチューするんだっ！」
「なんでっ!?」
「チューするとどっちが本当に好きかわかるはずっ！」
「いや、しないよ!?　そういう目的のためにキスはしないよっ!?」
「往生際が悪い兄貴だなぁ……だったら――」
ずいっと俺のネクタイが引っ張られ、晶の顔が近づいてくる。
「――こっちから行くよ。はい、チュー――……」
「や、やめろっ!?　まだ心の準備がっ！　おい、ちょっ、力強っ……――」

＊　＊　＊

「――やめてくれぇぇぇぇ――――――――――――！」
と、叫びながら俺はがばっと起き上がった。
「ハァ……ハァ……ハァ……」
周囲を見回してみると、ここは俺の部屋。
スマホを引き寄せて見ると、ディスプレイに『2022年1月2日　6：07』と表示されている。
――今のが、俺の……初夢？
なんだか、嬉しいような、怖いような……いや、めちゃくちゃな夢だった。
大人になった晶との甘い同棲生活かと思いきや、いきなり弟みたいな義妹に変わって、キスを迫られた――なんだそりゃ？
「あははは……なんて、初夢……んっ？」
なんだか今、ふにふにと柔らかい感触が……と思った瞬間――
「兄貴い～……どっちの僕がいいの～……チュ～～～～～　……」
「でぇぇぇぇ――――――――――――